

御神幸式絵巻と平戸の画僧

太宰府天満宮から榎寺までを平安時代の衣装で着飾った人々が練り歩く御神幸式。太宰府天満宮には、この秋の大祭の幕末ごろの様子を描いた絵巻が2点収蔵されています。

一つは、嘉永5（1852）年に平戸藩主松浦乾斎（熙）が描かせたもの（嘉永本）、もう一つは元治元（1864）年に天満宮別当の大鳥居信全が描かせたものです（元治本）。いずれも平戸の樹光寺円心という画僧の筆になります。嘉永本は天満宮の蔵品を写したものとされますが、祭りに参加する人々を色彩豊かに描きだしており、歴史的にも美術的にも高い評価が与えられています。

樹光寺円心は、ほかにも「太宰府天満宮曼荼羅勤行道場之図」（松浦史料博物館所蔵）などの作品を描いています。この平戸の画僧と太宰府をつなぎ合わせたものは何だったのでしょうか。それを解く鍵は、天満宮の執行坊信隆によって編まれた歌集「桂舎集」にあります。その下巻（嘉永4年成立）に、信隆が円心に与えた餞別の歌が収録されています。

円心法師平戸の君の御めしに
よりにて樹光寺にうつりすみけるをほきて

円かなる心の月もまつら山
しげき御蔭にてり増るらん



歌は僧号の「円心」と平戸の「松浦」氏をかけたものですが、前書きから円心がもともと太宰府に住んでおり、遅くとも嘉永4年までに平戸藩主の招きによって平戸の樹光寺に移ったことが判明します。これと同じ時期に、鐘崎良順（寛吾）という人物が円心と同様の経歴をたどっています。この人物は日清戦争で活躍した軍偵の父親として戦前の書物に現れます。

それによると良順（寛吾）は、文政元（1818）年筑後国三潯郡生まれ。青木天満宮と太宰府天満宮の社僧となつたのち、幕末に平戸藩主の招聘により樹光寺の住職になつたとあります。号は帶雲、洒脱な性格で書画に秀でたとも記録され、明治11（1878）年に亡くなつていきます（『烈士鐘崎三郎』など）。良順は明治に入り、還俗してからの名でしょう。八女市に住むご子孫に伝えられる良順の戒名には「円心」の2字があり、明治の良順と幕末の円心が同一人物であることを物語っています。幕末に二つの絵巻を遺した平戸の画僧。ここにも多様な人々によって彩られた太宰府の文化の一齣があります。

古賀康士